

モ菅茅花ノ如ニシテ長大ナリ、初ハ淡紫色後漸ク白色ニ變ズ、秋深テ苗枯ル、一名荻子草訓蒙字會

〔萬葉集十〕秋雜歌詠雁

葦邊在荻之葉左夜藝秋風之吹來苗丹雁鳴渡アシベナルヲキノハサヤギアキカゼノフキクルナベニカリナキワタル

〔萬葉集十四〕雜歌

伊毛奈呂我都可布河泊豆乃佐左良乎疑安志等比登其等加多里與良斯毛イモナロガツカフカハツノササラアジトヒトゴトカタリヨラシモ

〔後撰和歌集五〕秋大輔がうづまさの傍なる家に侍りけるに、おぎのはにふみをさしてつかはし

左大臣實藤原

山ざとの物さびしきは荻のはのなびくごとにご思ひやらる、

〔更科日記〕冬になりて、日暮し雨ふりくらひたる夜、雲かへる風はげしう打吹て、そら晴て月いみ

じうあかう成て、軒ちかき荻のいみじう風にふかれて、ただけまどふがいと哀にて、

秋をいかに思ひいづらむ冬深み嵐にまどふ荻の枯はは

〔倭名類聚抄二十〕萱 廣益玉篇云、萱魚飢反、典宜同、和名加夜。

〔箋注倭名類聚抄十〕按玉篇梁顧野王撰唐孫強增加字、宋大中祥符六年陳彭年等重修、名曰大廣

益會玉篇、然則孫強增字者之廣益、至宋重修名曰大廣益會歟、然本書引玉篇、皆無有廣益字、唯此

有之、疑是後人所增、下總本無者、似是魚飢反與玉篇合、在五支與宜同、與廣韻合、在六指、二音不同、

此與字上恐脫又字、略中今本玉篇艸部云、萱、萱莠草、與此所引不同、按嘉祐本艸云、萱草一名鹿葱、

花名宜男、引風土記云、懷妊婦人佩其花生男也、則知萱莠宜男俗字、然則玉篇萱字、可充和須禮久

佐、上文所載菅茅、乃可以充加夜也、略中按古事記云、訓葺草云、加夜、則知古書訓草為加夜者、謂覆

屋料草、菅芒蘆荻之類皆是、而茅為葺屋料之最佳者、故專加夜之名、

〔類聚名義抄八〕萱音宜カヤ

萱